

まえがき

第二波フェミニズムの登場からおよそ半世紀。あらゆる差別の中でもっとも自然化され、不可視化された差別である性差別を脱自然化し、可視化した思想と実践であるフェミニズムは、20世紀後半の世界を揺るがした。今日、「個人的なことは政治的である」という標語のもとに、第二波フェミニズムが再定義した概念である家父長制、ジェンダー、セクシュアリティ、セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス、ミソジニーなどなどの用語は日常言語の中に定着し、法律にも組み入れられるようになった。当初、フェミニズムが嫌われ、揶揄され、叩かれていたことを覚えている者には、隔世の感がある。

第二波フェミニズムは、近代の完成期にあたって近代批判として登場したが、それから半世紀経って、近代そのものが変質してきた。フェミニストがあればほど批判した「近代家族」はもはや多数派ではなくなったし、それを支える異性愛中心主義もセクシュアリティの多様化によって規範力を失ったし、「サラリーマン・専業主婦体制」も過去のものとなった。にもかかわらず、女性の生きづらさは少しもなくなっていない。

いかなる思想や理論も、時代と社会の産物である。近代の変質はさまざまな論者によって指摘されており、ウルリッヒ・ベックは「第二の近代」、アンソニー・ギデンズは「後期近代」と名づけ、またしばしば「ポスト近代」とも呼ばれる。ベックはそれを「リスク社会」と呼び、ジグムント・バウマンは「リキッド化する社会」と呼ぶ。いずれの論者も鋭敏に社会の変質を感じ取ってきた。それらの変化は、すべて第二波フェミニズムが登場した1970年代以降の産物である。先進諸国はのきなみ低成長経済を経験し、出生率は低下し、高齢化が進んだ。その時代は、グローバリゼーションとネオリベラリズムの時代でもあった。その変化に対応して、フェミニズムの思想と理論もアップデートしなければならない。

歴史的には第二波フェミニズムのあとも、第三波フェミニズム、第四波フェミニズムがあるといわれるが、理論的なブレイクスルーは第二波以降、起きているようには見えない。ジェンダー研究者の層は厚くなり、実証的な経験

研究は蓄積されたが、理論研究に大きなパラダイム転換があったようには思えない。運動の波は高まっても、理論の方は取り残されている感がある。

2022年、ジェンダー研究の盟友、江原由美子が新著『持続するフェミニズムのために——グローバルゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』（有斐閣）を刊行した。そこには江原が「第一の近代」と区別して「第二の近代」と呼ぶ歴史の新しい段階に対応して、第二波フェミニズムが生み出したさまざまな思想や理論が今でも有効か、すなわち「フェミニズムは生き残れるか」という切実な問いかけがあった。

本書は、その江原の真摯な問いかけを受け止めたジェンダー研究者たちによって書かれた。世代も分野もアプローチもそれぞれに個性的なジェンダー研究者たちが、多方面から江原の設定した問いに答えようとしている。相互の論文が補い合って、フェミニズム理論の新ステージが立体的に立ち上がることを実感してもらえらるだろう。

江原の新刊を読んだとたん、ここには重要な問いが書かれていると感じた上野が、共編者を引き受けた。日本における女性学・ジェンダー研究のパイオニア世代として共にこの分野を牽引し、尊敬する論争の相手でもあり、またこれまでも『日本のフェミニズム』（岩波書店、旧編8冊、1994-1995、新編12冊、2009-2011）や『岩波女性学事典』（岩波書店、2002）などの共編に関わってきたこの畏友と、再びタッグを組んで書物を世に送ることができてうれしい。

上野千鶴子

*上野千鶴子（うえの ちづこ）

■ まえがき，第1章

東京大学名誉教授

主著 『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店，1990年（岩波現代文庫，2009年）。『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会へ』太田出版，2011年。

*江原由美子（えはら ゆみこ）

■ 序章，あとがき

東京都立大学名誉教授

主著 『ジェンダー秩序』勁草書房，2001年（新装版，2021年）。『持続するフェミニズムのために——グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』有斐閣，2022年。

足立真理子（あだち まりこ）

■ 第2章

お茶の水女子大学名誉教授・ジェンダー研究所客員研究員

主著 「フェミニスト経済学の現在——『金融化とジェンダー』をめぐる方法的考察」『季刊経済理論』53（3）：7-22，経済理論学会，2016年。「ローザ・ルクセンブルク再審——新しい収奪の形態をめぐって」『思想』1148：5-22，岩波書店，2019年。

伊田久美子（いた くみこ）

■ 第3章

大阪府立大学名誉教授

主著 『フェミニスト・ポリティクスの新展開——労働・ケア・グローバリゼーション』（共編著）明石書店，2007年。“Impact of Marxist Feminism on Japanese Women’s Movement: Focusing on the Domestic Labor Debates,” Diane Elson ed., *Feminism and Gender Research in Japan*, Routledge, 2023.

岡野 八代（おかの やよ）

■ 第4章

同志社大学大学院教授

主著 『ケアの倫理——フェミニズムの政治思想』岩波新書，2024年。ジョアン・C・トロント著『ケアするのは誰か？——新しい民主主義のかたちへ』（訳・著）白澤社，2020年。

大沢 真理（おおさわ まり）

■ 第5章

東京大学名誉教授

主著 *Social Security in Contemporary Japan: A Comparative Analysis*, Routledge/University of Tokyo Series, 2011. 『生活保障のガバナンス——ジェンダーとお金の流れで読み解く』有斐閣，2013年。

山根 純佳 (やまね すみか)

■ 第6章

実践女子大学人間社会学部教授

主著 『産む産まないは女の権利か——フェミニズムとリベラリズム』 勁草書房, 2004年。『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』 勁草書房, 2010年。

阿部 彩 (あべ あや)

■ 第7章

東京都立大学人文社会学部教授

主著 『子どもの貧困——日本の不公平を考える』 岩波新書, 2008年。『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂』 講談社現代新書, 2011年。

金井 郁 (かない かおる)

■ 第8章

埼玉大学経済学部教授

主著 『フェミニスト経済学——経済社会をジェンダーでとらえる』 (共編著) 有斐閣, 2023年。『キャリアに活かす雇用関係論』 (共編著) 世界思想社, 2024年。

佐藤 文香 (さとう ふみか)

■ 第9章

一橋大学大学院教授

主著 『軍事組織とジェンダー——自衛隊の女性たち』 慶應義塾大学出版会, 2004年。『女性兵士という難問——ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』 慶應義塾大学出版会, 2022年。

兎玉谷レミ (こだまや れみ)

■ 第9章

一橋大学大学院社会学研究科博士課程

主著 「自衛隊における軍事的男性性の考察——ポスト近代の軍隊という視点から」『国際ジェンダー学会誌』20: 103-23, 2022年。「自衛隊の軍事的男性性をいかに論じるのか——戦う軍事組織か戦わない軍事組織か」『女性学』31: 106-23, 2024年。

三浦 まり (みうら まり)

■ 第10章

上智大学法学部教授

主著 『私たちの声を議会へ——代表制民主主義の再生』 岩波書店, 2015年。『さらば、男性政治』 岩波新書, 2023年。

目 次

まえがき 上野千鶴子 i

執筆者紹介 iii

序 章 今フェミニズムは何を議論すべきなのか ————— 1

ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて ■ 江原由美子

- 1 フェミニズム？ 反フェミニズム？——分断される社会 …………… 1
- 2 第二波フェミニズムとは？ …………… 6
- 3 フェミニズムを社会変動の中に置く …………… 8
- 4 ネオリベラリズムとグローバリゼーション …………… 11
- 5 「追われる国」と第二波フェミニズム …………… 13
- 6 ナンシー・フレイザーの第二波フェミニズム批判 …………… 18
- 7 今フェミニズムは何を議論すべきなのか …………… 21

第1章 再生産費用の分配公正を求めて ————— 25

家父長制と資本制・その後 ■ 上野千鶴子

- 1 はじめに …………… 25
- 2 資本制の変質——グローバル金融資本主義の時代 …………… 26
 - 2.1 「第一の近代」と「第二の近代」 26
 - 2.2 グローバル金融資本主義とは何か 28
- 3 家父長制と資本制——フェミニストの世界システム論 …………… 30
 - 3.1 家父長制と資本制——その対立と妥協 30
 - 3.2 世界システム論における中核と周辺 32
 - 3.3 世界システムと女性 33
 - 3.4 プロレタリアからプレカリアートへ 35
 - 3.5 「労働力の商品化」と「労働の商品化」 36
- 4 新・階級社会の成立 …………… 38
 - 4.1 格差の拡大 38
 - 4.2 格差とジェンダー 41
 - 4.3 新・性別役割分担 43
 - 4.4 日本におけるネオリベラリズム改革とジェンダーの再編 45
- 5 フレイザーへの反批判 …………… 46

5.1	フレイザーの第二波フェミニズム批判	46
5.2	日本版文化派 vs 経済派論争	48
6	家父長制なき資本制? — 資本制は家父長制を解体するか? ……	52
6.1	フェミニストの世界システム論——一元論か二元論か	52
6.2	ジェンダー間格差は正当化できるか	54
7	再生産費用の分配問題 ……	56
7.1	モノの生産とヒトの再生産	56
7.2	グローバル金融資本主義のもとにおける再生産システム	58
8	おわりに——誰が再生産コストを支払うのか ……	61

第2章 グローバル資本主義と再生産領域の金融化 —— 67

「フェミニズムの相貌を気取る新自由主義」を異化するフェミニズムを ■ 足立真理子

1	はじめに ……	67
	——「グローバル資本主義は労働力の再生産に責任をもたないのではないか」という「問い」への応答に向けて	
2	フェミニズムにおける資本主義認識——不自由, 無関心, 越境性	70
2.1	交差的労働力充当様式——「不自由」な交換	71
2.2	労働力の再生産過程——「外部」への依存と無関心, そして「収奪」	73
2.3	グローバル資本主義の逆説——越境, 異種混交性, そして「女性化」	77
3	グローバル金融危機以降の変貌とフェミニズムの新たな問い ……	81
3.1	生産・再生産・金融領域のグローバル化と節合——相対的自律性再考	81
3.2	金融化——金融領域と再生産領域の節合	86
3.3	階層化——金融排除・金融包摂・金融過剰包摂	88
4	再生産領域の金融化 ……	90
4.1	資本主義の構造的変化としての金融化——金融化資本主義 (financialized capitalism)	90
4.2	再生産領域の金融化	92
5	「フェミニストの顔をした新自由主義」というアイロニー ……	95
5.1	グローバル金融危機の衝撃と「スマート・エコノミクスとしてのジェンダー平等」	95
5.2	「トランスナショナル・ビジネス・フェミニズム」(TBF)の台頭のもたらしているもの	98
6	おわりに——後背地を創造する ……	100

第3章 資本主義批判としてのフェミニズム —————	109
マルクス主義フェミニズムを振り返る	■ 伊田久美子
1 はじめに	109
2 第二波フェミニズムのインパクト	110
— 「近代」からの解放と「近代」の転覆	
3 ブレトンウッズ体制の崩壊と経済のグローバル化	115
— 第二波フェミニズムの背景	
4 グローバリゼーションと女性の登場による「労働」の拡張と変 化	117
5 資本主義批判としてのフェミニズム	121
— マルクス主義フェミニズムと社会的再生産フェミニズム (SRF)	
6 おわりに—「同じ女」から「多様な者の連帯」へ	128
第4章 生産中心主義批判から、リベラリズムとの対抗へ —	133
第二波フェミニズム理論はいかに継承されてきたか	■ 岡野八代
1 差異か平等かをめぐる、フェミニストたちの格闘	133
2 第二波フェミニズム理論におけるマルクス批判から、ケア労働 の発見へ	137
2.1 ウーマン・リブからの出発	137
2.2 社会主義フェミニズムの意義—マルクス主義との対決	139
2.3 再生産労働から、ケア労働へ	142
3 第二波フェミニズム理論の深化—リベラリズムへの対抗	145
3.1 生産パラダイムからの脱却	145
3.2 家父長制批判から、リベラリズム批判へ	147
3.3 資本制・家父長制・リベラリズムのインターセクショナルな理 解へ	151
4 むすび：継続する第二波フェミニズム理論	156
— 新自由主義との対決	
第5章 「男性稼ぎ主」型が命と暮らしを毀損している —	163
社会政策の比較ジェンダー分析による洞察	■ 大沢真理
1 問題の所在	163
2 生活保障システムの形成—駆け足の世界史	165
2.1 近代以前の政府	165
2.2 大転換と大河内理論	166

2.3	社会政策の発展に自由主義が影響	168
2.4	地球の持続可能性	170
3	生活保障システムの機能をどうとらえるか	171
3.1	機能と「型」	171
3.2	指標とリスク想定に限界	172
3.3	災害は自然ではなく、平等主義者でもない	173
4	日本の生活保障システムの特徴	175
(1)	公助が貧困を深めてしまう	175
4.1	コロナ前夜の状況	175
4.2	コロナ禍でどうなったか	178
(2)	コロナ禍よりもコロナ対策禍	179
4.3	累積死者数	179
4.4	男性のリスクが高いのか	179
4.5	超過死亡という問題	180
4.6	比較的若い女性の自殺が増えた	181
5	結語に代えて	182

第6章 ケアの再公共化とフェミニズムの政治 ————— 187

福祉国家・ケア・新自由主義 ■ 山根純佳

1	はじめに	187
2	福祉国家論とジェンダー平等	188
2.1	脱家族化と市場化ルート	188
2.2	福祉国家の再編——サービス供給から条件整備国家へ	191
2.3	ケア労働を社会化しなかった介護保険制度	194
2.4	ケアの市場化と下降する家族主義	197
3	ケア労働をめぐるフェミニズムの理論・政治	199
3.1	ケア労働の貢献を可視化する	199
3.2	ケア労働の国際比較	201
3.3	「ディーセントなケア労働」の確立に向けた政治的課題	204
	「ケア・レジーム」	204
	「移住レジーム」——移住労働者の社会的統合	205
	「雇用レジーム」	206
4	市場モデルを超えるアクティヴィズムと再公共化	210
4.1	ケア・ミュニシパリズムとケアの再公共化	211
4.2	使う側の責任	212

第7章 女性の貧困の再考察	219
長期時系列データから	■ 阿部彩
1 はじめに	219
2 女性の貧困の現状	221
2.1 女性の貧困率の現状と推移	221
2.2 配偶関係別の貧困率	224
3 死別女性の貧困率動態と世帯構造	226
4 死別女性に対する社会保障制度の防貧機能	229
5 未婚女性の貧困率動態と世帯構造	230
6 未婚女性に対する社会保障制度の防貧機能	232
7 女性の貧困——再考察	234
7.1 死別女性の貧困	234
7.2 未婚女性の貧困	235
8 さいごに	236
第8章 女性労働のゆくえ	239
能力発揮をフェミニズムはどのようにとらえるか	■ 金井郁
1 はじめに	239
2 日本の女性労働の現在地	240
3 「男性稼ぎ主モデル」に依拠した主婦パートモデル	247
4 「能力発揮主体」としての女性の「意思」への働きかけ	251
5 フェミニズムと能力発揮——フェミニスト経済学の知見から	257
第9章 フェミニズムと戦争・軍隊	263
21世紀の新たな難問	■ 佐藤文香・児玉谷レミ
1 はじめに	263
2 フェミニズムの女性兵士をめぐる論争	264
3 新しい戦争，ポスト近代の軍隊	267
4 フェミニストの価値観の浸透	270
5 民間軍事安全保障会社の台頭	273
6 ジェンダー化・人種化・階級化された「保護」の論理	275
7 むすびにかえて	277

第10章 フェミニズムの新自由主義化に抗う ————— 283
女性解放の現代的課題 ■ 三浦まり

1	はじめに	283
2	新自由主義の侵食	285
2.1	資本主義・危機・差別	285
2.2	家族賃金のその後——日本的展開	287
2.3	新自由主義の磁力と統治性	289
3	再生産の危機とフェミニズム	292
3.1	再生産の危機と新自由主義的母性	292
3.2	少子化の危機と母親罰	293
4	生産領域におけるフェミニズムの政治利用	296
4.1	新自由主義化するフェミニズム	296
4.2	右傾化する政治と女性利用	299
5	おわりに	301

あとがき 江原由美子 305

事項索引 309

人名索引 320

あとがき

本書の企画が持ち上がったとき、わたしは、自分の問題意識から生まれた問いが多くの人に引き継がれ新たな展開となることのうれしさとともに、「いったい問題意識の共有ができるのだろうか」という不安も感じていた。またこの論集に対する強い期待感とともに、これからの歴史の新しい段階に対応する理論展開の可能性を強く予期させるものになりうるかどうかという不安もあった。しかし今、集まった10本の論文を前にして、自分の不安が杞憂にすぎなかったことを、まざまざと思い知らされた。不安をもっていた自分の不明を恥じる思いで、いっばいである。

思い返せば、最初からその兆しはあった。各論者に原稿をお願いしてみると、ほとんどの方々から、ためらいが感じられないご受諾のお返事をいただくことができた。この種の企画としてはかなり余裕がない日程だったにもかかわらず、多くの方に研究会にご参加いただくこともできた。また時期的に厳しい原稿の締め切り日の設定だったにもかかわらず、ほぼ締め切りどおりに原稿をいただくことができた。本当にありがたく思う。論文をお寄せいただいた各論者の方々の、熱い思いを感じられた編集過程であった。

しかも、集まってきた原稿はどれも、「歴史の新しい段階」における実証分析の課題・方法・理論展開等を示唆するものであり、今後のフェミニズム社会理論の展開の可能性を十分感じさせる論考であった。そこには、グローバル資本主義の理論的考察とフェミニズム理論、ラディカル・フェミニズムからマルクス主義フェミニズムを経てケア論に至る流れについての考察、グローバリゼーション時代における社会政策の国際比較や日本の社会政策の特徴、社会構造変動と各社会政策下での女性の社会的状況の分析等、非常に広範囲で多彩な論述がなされている。そして、中心的軍事力を国民軍から民間軍事会社に移しつつある21世紀における「女性と軍隊」の問題や、福祉国家におけるネオリベリズム的編成がもたらす問題、コロナ禍における女性の雇用や貧困の問題等、具体的事象から社会全体の変容を見通すに十分な、理論的戦略性のうえで重要性をもつ論点が、並んでいる。フェミニズムの理論的展開から個別の事象の分析まで、マクロからミクロまでさまざまな論点が提示されている。しかも

それらの多様な論文は皆、フェミニズムがネオリベリズムとどのように関わり、それをどのように超えていくのかという大きな主題に絡んで展開されている。それぞれの論者が提起している問題は、簡単に解決できるような問題ではないかもしれない。しかしだからこそ、その論点は、これからの社会を見据えるうえで、大きな論点となりうると思う。

論考をお寄せいただいた方々のこのような熱意は、本書のタイトルをも変えることになった。本書は最初、編者の1人である上野千鶴子が「まえがき」で書いているとおり、「フェミニズムは生き残れるか」という問いかけをそのままタイトルとして刊行することを予定していた。けれども議論していく中で、多くの論者からこの問いかけに対する違和感が表明された。「フェミニズムが生き残れるかどうか自体が問題なのか。フェミニズムの存続を自己目的化するのはおかしい」「フェミニズムの存続自体が問題なのではなくて、今問題になっているのは、人類の存続自体だと思う。フェミニズムが生き残れないような未来には、人類の滅亡という選択肢しか残されていないのではないか。それが問題なのだと思う」「そうだとすれば、問題なのは『フェミニズムは生き残れるか』ではなく、生き延びるために必要な『フェミニズムをどうしたら展開できるか』ではないか」等。こうしたご意見を受けて、本書のタイトルは「フェミニズムは生き残れるか」から『挑戦するフェミニズム』に変わった。このような議論からもわたしは、強く背中を押されたように感じた。気弱な不安から始まったわたしの本書の企画編集作業は、フェミニズム理論の展開への熱意の奔流の中で、終わろうとしている。

その意味で、本書の企画に携われたことは、個人的には大変意義あることだった。とくに今強く感じているのは、この論集が期せずして、自分史をたどるような機能を果たしたことである。「そうだった、あのときはこんな状況の中で、手探りで問題を考えていたんだ」「あの理論から別の理論に移った背後には、そんな問題意識があったんだ」等、さまざまなことが回想され、この半世紀の自分の歩みを見る思いであった。今となればもう変わってしまった過去の女性像を前提とした「古臭い時代にそぐわない理論」に見えるかもしれない理論も、それぞれの時代において1人ひとりのフェミニストたちが挑戦し格闘しながら生み出した理論だった。『挑戦するフェミニズム』とはまさに、こうした第二波フェミニズムの軌跡をたどる論集であるとともに、これからの新しい歴史の段階に向けて挑戦するフェミニズムの論集でもある。1つの問いかけ

が複数の問いかけを生み、それぞれが無数の問いかけとなって、世界に広がっていくことを、願う。

最後に、この企画を発案し最初から最後まで議論にお付き合いいただき原稿に丁寧に目を通していただいた有斐閣の松井智恵子さんに、心から感謝したい。「これからのフェミニズムのために活発な議論を生み出せるような論集を作りませんか」という松井さんの熱い思いと企画発案がなければ、本書は生まれなかった。本当にありがとうございました。

2024年6月

江原由美子

挑戦するフェミニズム

—ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて

Feminism Keeps Challenging : Beyond Neoliberalism and Globalization

2024年8月20日 初版第1刷発行

編者 上野千鶴子・江原由美子

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

装丁 麒麟三隻館

印刷 萩原印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2024, Chizuko Ueno and Yumiko Ehara.

Printed in Japan ISBN 978-4-641-17499-3

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

SCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。